

関西地域におけるキリスト教会の在日中国人 留学生の定着性

—イエス教大韓聖潔教会京都宣教教会を中心に—

LI YUN

本研究では、主に京都における韓国系キリスト教会に所属している中国人留学生や、在日中国人などを研究対象として、半年間にかけて実際に一般人として教会に通っていたことをふまえ、さらに無作為に教会内で13名インタビュー対象者を選出し、それぞれインタビュー調査を行ったうえで、作成したものである。

第一章のはじめには、本研究で取り扱っている問題を提起する。日本に留学する外国人たちにとっては、留学生としての困難は決して学習面だけではなく、生活面ではカルチャーショックや差別を受け、経済面では高額な学費の納入や生活費用の出費もあり、各方面のさまざまな困難に直面しなければならないと思われる。厳しい生活環境のなかで、さらに時間を切り詰めて教会に通う留学生がわりと少なくはない。いったいどのような留学生が教会へ通っているのか。そして、教会へ通うきっかけはなんなのか。教会は彼らに対してどのような影響を与えたのか。卒業した後も日本での生活を選択した場合、教会との関係がどれほどあるのか。来日したばかりの不安だった一人暮らしから少し安定し、日本社会に定着するまでの変化に、教会がどれほど影響を与えているのかを明らかにしてみたいと思う。

第二章では、本文を展開する前に、これまでの先行研究に関して詳細に検証してみた。まずキリスト教会とジェンダー、特に教会の管理層に入った男女比について、李恩子や薄井篤子、石川照子などの研究が詳細に述べたが、李は在日大韓基督教会(KCCJ)を中心に女性牧師の位置付けについて論じ、薄井は主に日本基督教団の「性差別問題特別委員会」の取り組みについて述べ、石川は大体1920年から1940年代にかけて中華民国から中華人民共和国建国初期位までを対象に、中国の女性とYWCAといったキリスト教との関わりについて研究する。そのほか、白波瀬達也、吉野航一は日本における韓国系キリスト教会をめぐって詳細な研究成果を出したが、注目している地域や教会の特徴に大きな違いがある。モリカイネイは華人系キリスト教会に注目しているが、世界

中の華人系キリスト教会について主に述べている。本研究のように、韓国系キリスト教会を着目しつつ、関連性が高い研究成果を挙げ、注目すべきは中西尋子と李賢京の研究である。これらは京都における韓国系キリスト教会、さらに信徒の主体が中国大陸の出自を持つ在日中国人留学生を対象としたものではない。

第三章では、京都宣教教会の概要について詳細に紹介してみた。京都宣教教会は2004年に京都市南区に設立し、インタビュー調査を実施したところ、教会に所属している信徒数は133名、そのなかで、約9割は在日中国人である。多くの中国人留学生が現役で、ほかに、かつて留学生だったが、すでに学校を卒業して会社員として働いている在日中国人もいる。信徒の年齢層からみると、20代か30代の若者が9割以上占めており、きわめて若い教会だということである。そして、男女の比率からみると、合計133人のなかに、男性61名女性72名が在籍しており、男女の比率は46%対54%であり、女性のほうが少し多い。実は、京都宣教教会のほかに、いくつかの関連教会がある。それぞれ大阪宣教教会、名古屋宣教教会、東京宣教教会、中国における広州宣教教会と瀋陽宣教教会、合計6個の関連教会がある。

そのほか、2021年9月をもって、教会の管理組織に関して新しい改革が実施された。組織改革をした後、かつての20個グループを11個に縮小し、かつ1グループのなかでそれぞれ担当分野を分けて5名のリーダーが配属される。資金源としては、主に信徒たちからの「10分の1」の献金や日曜日の主日礼拝での自由献金、そして最後にさまざまな献金名目を立てている特別献金から成り立っていることがわかった。

第四章では、インタビュー調査を実施した日付や場所を記録し、そして、それぞれ一対一の形で音声記録を取ってインタビュー調査を行った。また、調査を行う前にインタビュー調査の内容についてしっかりとインタビュー対象者と説明し、理解したうえで調査同意書などをサインしてもらった。その後、手元の音声記録をもとに、重要な関連情報をまとめた図表を作成した。

ここで、本研究の冒頭に在日中国人留学生は日本での生活のなかで何らかの解決できない困難や悩みなどと遭遇した場合、ある人はキリスト教会に何か問題の解決策を求めて教会に通い始めたのではないかと、といった仮説をしたが、実際にキリスト教に入信した道がそれぞれ異なることが、インタビュー調査を通して判明した。例えば、必ずしもキリスト教会に何か問題の解決策を求めて教会に通い始めたのではなく、むしろキリスト教会の信徒によって訪問伝道や街伝道といった方式で伝道され、入信した。あるいは、中国人のネットワークを利用し、キリスト教会に紹介され、入信した信者もある。案外に、自らキリスト教の教会を探して入信した信者は多くはないようである。

一方で、洗礼を受けるということによって、正式にキリスト教の信徒になるということの意味する。しかし、洗礼を受けたとはいえ、その時点において決してすべての人がキリスト教に対して固く信じるわけではない。むしろキリスト教を固く信じる人もいれば、そこまで信じるわけではないが、とりあえず

洗礼を受けてみようと思っている人もいる。人によっては、キリスト教に対する信仰が強くなるまで期間が異なるが、後に、非常に信仰を持つようになった信者も少なくはない。

第五章では、京都宣教教会の管理層の女性比率が 75 パーセントに達し、きわめて高い。また、教会では自ら受洗をした信徒もいれば、先輩に勧められて受洗をした信徒も少なくない。教会の草創期において中国人朝鮮族によって中国人留学生に伝道し、その後、中国人のネットワークを利用して多くの信徒によって伝道し、教会の規模が拡大される。そのほか、教会内の婚姻関係を推薦し、私的な繋がりが構築されている。

結果、教会の影響によって日本で生活していくということになり、さらに京都宣教教会は日本だけにあるため、教会から離れたくない信者もいる。しかし、それは、彼らが最終的に宗教の力に頼るしかない窮地に迫られる日本社会のほうに問題があるのではないかと。